

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第11号 2015年11月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 東京大学駒場博物館の狩野亨吉展 —学内史資料を駆使した展示の試み—	富岡 勝	2
逸話と世評で綴る女子教育史(11) —北海道開拓者の妻を養成する開拓使女学校—	神辺 靖光	4
人はいかにして、人たり得るのか!(そのⅣ) —棋士・レスラー・俳優の回顧談から—	谷本 宗生	7
大阪市の女子教育③ —大阪府における女子教育の概要・その2—	徳山 倫子	13
近代日本における大学予備教育の研究⑩ —東京商科大学予科と旧制高校の学科課程—	山本 剛	17
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道 第11回 学校沿革史にみる補習科・専攻科(7):島根県(1)	吉野 剛弘	22
活版印刷以前の校内雑誌 〈資料紹介〉立教大学における戦後資料 —『立教大学新聞』にみる学生運動(6)—	堤 ひろゆき	25
帝国大学の中の専門学校 —東北帝国大学工学専門部、九州帝国大学附属工業専門部—	田中 智子	29
新制大学の生態誌(10) —新制大学と戦争・平和[4]—	松嶋 哲哉	31
「学生寮の時代」② —裾野の広い先行研究—	井上 美香子	35
『岩手学事彙報』にみる奥羽各県尋常中学校生徒の比較試業	金澤 冬樹	37
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか(9) —東京府尋常中学校長 勝浦頼雄の校友会活動観(その1)—	小宮山 道夫	42
刊行要項(2015年6月15日現在)	富岡 勝	45
編集後記		48
		49

コラム

東京大学駒場博物館の 狩野亨吉展 一学内文書 を駆使した展示の試み一

とみおか まさる
富岡 勝 (近畿大学)

先日、東京大学駒場博物館の
秋季特別展「教育者・菟書家・鑑
定人 狩野亨吉 生誕 150 周年
記念展」(開催期間 10 月 17 日～
12 月 6 日)を、見学してきた。

狩野亨吉は、展示タイトルにもあ
るように、高等学校や京都帝国大

学で活躍した教育者としてだけでなく、菟書家、書画骨董の鑑定人として
も活躍した知る人ぞ知る人物である。

この展示は、狩野が学んだ
東京大学予備門(1879 年～
1884 年在学)と校長を務めた
第一高等学校(1898 年～
1906 年在任)を源流とする東
京大学駒場キャンパスの図書
館に所蔵されている狩野の来
簡、メモ、授業ノート、日記や目
録などを中心的な展示資料と
して活用して、「多才にすぎてと
らえがたい狩野の実像に迫ろ
うとする」(展示案内より)とい
う趣旨で企画されたものであり、
計 190 点近くの史資料が展
示されている。

展示を見学して、狩野という
人物の多彩な側面を実感した。それと同時に、狩野関連の学内史資料
の豊かさが印象に残った。例えば、東京大学予備門と東京大学在学時
の史資料として、狩野個人が保存していたと思われる史資料だけでなく、

東京大学駒場博物館 秋季特別展

教育者・菟書家・鑑定人
狩野亨吉 生誕150周年記念展

会 場：東京大学駒場博物館 (Tel: 03-5454-6139)
会 期：2015年10月17日(土)～12月6日(日)
開館時間：10:00～18:00 (入館は17:30まで)
休 日：毎週火曜日 (11月3日は祝日のため開館)
主 催：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館
東京大学駒場図書室
共 催：目黒区教育委員会、駒場友の会

同館の展示案内(表面)

「授業料之儀ニ付願」(1879年)、「東京大学予備門前本覺生徒優劣表」(1883年)、「授業料減額願」(1884年)などの学内文書が駆使されている点である。これにより、「狩野以外の同時代の在學生についても学内文書の活用によって色々わかるのではないか」という手応えも得られた。

また、同館の丹羽みさと氏の編集で、A4 サイズ 32 頁にびっしりと解説と史料翻刻が書かれた展示目録がつくられている点にも驚いた。手紙の全文翻刻なども手許に残ることになるので、内容に興味がある来場者にとって、大変有り難い。同館が展示史資料と来場者とをつなぐ試みに並々ならぬ労力をかけていることに注目したい。

さらに、来場者と展示をさらにつなぐ試みとして、来場者による展示物の人気投票ができるようになっていた。これは、来場者がポストイットに感想などを鉛筆で記入し、展示ケースの上や壁などに自由に貼り付けるというものである。筆者も実際に 10 枚ほどの記入して楽しんだ。他の来場者がどのような展示物にどのような興味をもったのかも知ることができ、展示への関心と理解につながり得る試みだと感じられた。

大学に保存されている文書は、場合によっては、現在の大学問題を考察する上で欠かせない史料になり得る。このことは、「現代の大学問題を視野に入れた教育史研究」に関心をもつ人にはすでに常識だろう。現在、全国大学史資料協議会<<http://www.universityarchives.jp/>>に参加している大学などで、大学アーカイブズが設立されており、収集した史資料と学内外の人々とを結ぶ活動として展示活動に力を入れている大学アーカイブズもある。(ちょうど、12月19日に南山大学史料室でシンポジウム「展示を利用した自校史教育の可能性」が開催されることを知った)。今回紹介した東京大学駒場博物館の展示の取り組みは、大学所蔵史資料の公開についての新たなヒントを含んでいるかもしれない。12月6日までは展示が続いているので、ご興味のある方はぜひ。

***このコラムでは、読者の方からの投稿もお待ちしています。**

逸話と世評で綴る女子教育史(11)

—北海道開拓者の妻を養成する開拓使女学校—

かんべ やすみつ

神辺 靖光(月刊ニューズレター同人)

開拓使は太政官政府の官庁の一つで省と並ぶ格式である。その長官は各省の卿と同格であった。北海道の開拓を任務とする。はじめ、明治政府は北海道を有力各藩や武士団で分割開拓するつもりであった。しかし奥羽のいくつかの藩が応じただけで、全国の雄藩からはそっぽを向かれた。そこで、政府は開拓次官・黒田清隆に命じて欧米の開拓事情を調べさせ、西洋流で開拓することにした。

黒田の北海道開拓事跡については、明治 18 年大蔵省刊『開拓使事業報告』第 4 編にくわしく書かれている。本稿は同書と、それを要約した『創基 50 年記念・北海道帝国大学沿革史』(大正 15 年刊)、さらに、開拓部分を補訂した三好信浩『日本農業教育史の研究』(昭和 57 年刊)によって書こう。

北海道開拓の使命を帯びて渡米した黒田は米国の大農式農業に魅せられ、米国農務長官・ケブロンを日本開拓使顧問にすることを約し、開拓の専門家 2 名を雇入れ、開拓機械を買入れて帰国した。

明治 5 年 1 月、まず農工の仮学校を東京に設け、その成果を見た後、これを北海道に移すという計画をたて、3 月、東京芝の増上寺の方丈跡を仮学校として、4 月に開校した。6 月、開拓使は仮学校に女学校を併設し、官費生、12 歳から 16 歳までの少女 20 名を募集した。この種の募集は官庁の役人の口添えで行われたが、黒田のやり方は、そんな生ぬるいものではなかった。開拓使の部下を使って北海道開拓者の娘たちの中から札幌周辺で 9 名、函館周辺で 6 名の少女を集め、小樽、函館から汽船で東京に送った。その中に 5 人のアイヌ人がいる。士族・平民の差別、人種の偏見がある当時、思い切ったことをするものである。南北戦争後の人種平等を主張するアメリ

力を見てきた黒田だからであろう。この直後、政府から生徒への官費支給廃止が告げられた時、黒田は、これらの生徒は「みなわが開拓使の子ども」だから官費支給せよと譲らなかった。かくして明治 5 年 9 月、東京芝の開拓使仮学校で、この女学校は発足したのである。

入学に際し、女生徒達は次のことを誓わされた。「成業ノ上ハ五年間、御使ニ従事可仕、且北海道在籍之人ニアラザレバ婚姻仕ル間敷事」。

官費生であるから卒業後 5 年間の開拓使勤務は当然のこととしても、北海道開拓者との結婚を強制するなど常識では考えられぬ。つまり、この女学校は開拓使学校卒業者の花嫁養成学校として考えられたのである。黒田だからこそ思いつく奇策であった。後年、昭和のはじめ、現中国東北部に展開した満蒙開拓青少年義勇軍の開拓者に対して、「大陸の花嫁」と称して未婚女性を組織的集团的に送り出したことがある。それが人間蔑視とも気づかず、このようなおせっかいのやり過ぎは日本人の悪しき一つの習性か。諸外国でこうした事例は聞かない。

開拓使仮学校は普通・専門2科として発足した。普通学は皇漢学、英仏語、算術、手習、日本地理、窮理、歴史、体操、舎密、器械、測量、本草、鉱山、農学。専門学は、器械舎密、鉱山地質、建築測量、農学本草学禽獣学の 4 コースの一つを選択するようになっていた。これに対し、女学校は漢学、英学、習字、数学、裁縫の普通課程だけであった。

こうして発足したものの、開校1ヶ年もたたぬ明治 6 年 3 月、仮学校は一旦閉校になった。逸話を書けば、風紀の頹廢に立腹した黒田がステッキを振り廻し、真赤になって怒り、生徒を追い出して閉鎖したとされる。その理由は生徒が外国語に通ぜず、外国人教師の言うことが、全くわからなかったからであった。そこで、専門学はやめ、普通学だけで再開し、学校の方針を練り直すことになった。

前にあげた専門学のコースでわかる通り、仮学校は鉱工業と農業の専門学校を目指したものであった。これは仮学校の専門学のお雇い教師アンチセルの提案で、東京には耕作学校（農業と工業）を、札幌に術科学校をたてる予定であった。これに対し、開拓使顧問のケプロンはマサチューセッツ農科大学をモデルとした Agricultural College をたてる計画であった。黒田ははじめ、アンチセルの計画によったが、専門学実施の困難さを悟り、アンチセルを解雇し、ケプロン案によりマサチューセッツ州農学校長クラークを招聘して札幌農学校設立に向かうのである。

この間、女学校は外国人女教師を何度も替えながら英語をはじめ、もろもろの学習に励んだ。明治6年5月には皇太后、皇后の行啓があり、励まされた。また洋服を廃し、日本風小倉織和装にする一方、食事はパンと肉食に改め、米の少ない北海道に適応させるようにした。

かくて明治8年7月、東京の開拓使仮学校と女学校は札幌に移転し、札幌学校、札幌女学校と改称した。東京から札幌女学校に移った生徒は34名。この中にアイヌ娘はすでにいない。開拓使当局は校舎の整備につとめた。また見張所を造築して熊の来襲に備えた。女生徒達がクマの出没に恐れをなしたからである。女生徒達は熊の出現もさることながら、気候風土の激変に堪え切れず、退学を願うものが続出した。明治9年5月2日、遂に札幌女学校廃止、女生徒は帰京し、東京からついてきた英国女教師エリザベス・デニススは6月帰国した。かくて黒田が企図した開拓者のための花嫁学校は壊滅した。

女学校の廃止解散と入れ替わるように、9年7月、ウィリアム・クラークが東京で面接し、入学を許した学生11名を伴って札幌にきた。8月14日に開校式を挙行し、9月8日に札幌農学校と改称した。現北海道大学である。

人はいかにして、人たり得るのか!(そのIV)

—棋士・レスラー・俳優の回顧談から—

たにもと むねお

谷本 宗生(大東文化大学)

今回の“人はいかにして、人たり得るのか”は、棋士@羽生善治さん(1970年～)、プロレスラー@棚橋弘至さん(1976年～)、俳優@風間杜夫さん(1949年～)が、いかにしてそれぞれの世界において自立して生きているのかを考えてみたい!と思うのである。棋士・名人@羽生善治さんは、小学生の名人戦で優勝して棋士@二上達也さんを師事して、奨励会に入会する。全国から将棋の俊才らが集い、会員同士で定期的に対戦して三段から四段に昇段して、初めてプロ棋士として認められる仕組みである。奨励会に入ってもプロになれる確率は、凡そ3割弱という狭き世界である。26歳までには四段にならないと退会しなければならない慣行もあるという。羽生少年は、3年間そんな厳しい?奨励会に在籍し、将棋生活と学校生活の掛け持ちを経験したという。だが不思議と、辛いな!と感じたことはなかったよ。驚。「月に二回の対局がある日には朝六時には家を出て、二時間半かけて将棋会館に通った。対局数が増えると授業を休む日も増えた。授業について行くのは大変だったが、友人にノートを借りたり何とか遅れを取り戻そうとしていた。プロになってからもそんな生活が続いたが不思議につらいと思ったことはなかった。大阪で夜中まで対局して始発の新幹線に乗り、授業に出ていたのも今となっては良い思い出だ。そして、なによりも勝負の世界に身を置いていると気が休まることがない。そんなとき、学校の生活や友人たちとの会話から、将棋とはまったく違う社会を知ることができ、格好の気分転換にもなった。奨励会では、当時はまだパソコンがなかったので、すべてを自分で考え、自分なりの勉強法を見つけてきた。自分の頭で考え、工夫する—その苦労や努力だけが自分の力になるのだと思う。」(羽生善治『決断力』2005

年、182～183頁)。四段への昇段を決めた中学生棋士@羽生さんは、今でもその時の熱い気持ちを忘れない!という。師匠の二上先生から、タイトル戦を早く狙えるような棋士になりなさい!という激励から、和服をプレゼントされて感激した。「私を育て、陰で支え続けてくれた師匠をはじめ、家族や周りの人たちのことを思うと、勝負という修羅場の中でこれからも『がんばろう』という気持ちが沸いてくるのである。」(同上書、185頁)。羽生哲学・羽生さんなりの持論がある。どんな世界の才能でも、「報われないかもしれないところで、同じ情熱、気力、モチベーションをもって継続してやる」(同上書、171頁)ことだと。「誰でも、時には落ち込んだり、挫折感を抱いたり、飽きたりもする。特に最近、他の刺激をうける機会が多い。誘惑もされやすい。若い人たちが自分を信じ、諦めずに一つのことを続けるのは難しい。一つのことに打ち込んで続けるには、好きだということが根幹だが、そういう努力をしている人の側にいると、自然にいい影響が受けられるだろう。さらに、ペースを落としてでも続けることだ。無理やり詰め込んだり、『絶対にやらなきゃ』というのではなく、一回、一回の集中力や速度、費やす時間などを落としても、毎日、少しずつ続けることが大切だ。無理をして途中でやめてしまうくらいなら、『牛歩の歩み』にギアチェンジしたほうがいい」(同上書、172頁)と。そんな羽生名人ながら、ミスはどう考え行動するか?という局面のサジェストがある。「答えは二つある。一つは、悔やんでも仕方がないので、それまでのことはすべて無にして、『自分の将棋は次の一手から新たに始まる』と思うことだ。もう一つは、忘れることである。これがいちばんの策と言えるだろう。私は、どんなにひどいミスをして、すぐ忘れるようにしてきた。…将棋に限らず日々の生活のなかでも、一つの選択によって極端にプラスになるわけでもないし、取り返しのつかないマイナスになるわけでもない。地道にプラスになるような小さな選択を重ねることで、いつか大きな成果に至るのではないかと思っている。」(羽生善治『大局観 自分と闘って負けたくない心』2011年、51頁)。

プロレスラー@棚橋弘至さんは、高校生時代・大垣西高校野球部で右サイドスローの変化球投手の2番手であったという。「速い球を投げるには筋肉をつければ良いと思い、たくさん筋力トレーニングをしたが、球速も制球も全然だめだった。」(「100年の記憶 棚橋弘至さん エースへの憧憬 今も」『毎日新聞』2015年7月8日、17面)「キャッチャーもでたらめなヤツで、1イニング全球カーブを要求してきたことがあった。出るサイン、出るサインが全部カーブなので、僕はマウンド上で『マジか! マジか!』と言いながらひたすらカーブを投げ続けたこともあった。」(棚橋弘至『棚橋弘至はなぜ新日本プロレスを変えたのか』2014年、27頁)と。笑。棚橋さんにとって、この野球部時代の思い出はその後のプロレス人生にも+になったという。「いろいろとおかしなトレーニングをしていたけれども、いま思うところのトレーニングはめっちゃめっちゃ僕の体力と各部位の筋力の強化につながっていても、プロレスラーになってからかなり役立った。砲丸を投げることで、足腰も体幹も鍛えられて、自分よりも大きな相手と闘うときの僕の武器になっている。」(同上書、同頁)「もっと投手として成長できていたらという後悔の念と、エースへの憧憬がある。プロレスラーになって、その思いが爆発した。…高校時代にできなかったことを、今やっている感じです。高校野球をやって本当に良かった。ウエートトレーニングの基本を学び、エースへの憧憬が生まれた。すべて今につながっている。」(同上誌面)。高校卒業後、プロ野球選手になれない!なら、その当時は伝える側の新聞記者になろうと考え、立命館大学法学部に入学し、先輩らにサークル勧誘されるまま、好きだったプロレスの同好会に入会する。そして自己流にトレーニングを続け、こんどは同好会出身のプロレスラーになろう!と決意する。大学3年生の時、新日本プロレスの入門テストに合格する。この時の棚橋さん自身は、直ぐにでもプロレス界に入門するつもりだったようであるが、先輩レスラー@長州力さんに

一喝される。「プロになっても辞めるかもしれないし、怪我をするかもしれない。ちゃんと[大学]卒業はしてこい!」(同上書、29頁)と。ところが、大学生@棚橋さんは4年生になった際、中退するつもりもあり卒業まで58単位も残っていて、1年間で取得できる単位数が60ゆえ、長州さんの喝を受けて1コマも落とすこともできず、必死に勉強して留年せず大学を卒業できたという。当初、棚橋さんはレスラーに「大学卒の肩書き」なんて必要ないと感じていたそうであるが、現在はとても感謝しているよし。「必死になって試験勉強して得た知識は、いまコメントをするときの言葉選びに役立っているし、親に大学に行かせてもらって、卒業というかたちで結果は残せた。しかも『立命館大卒』という肩書きでクイズ番組にも呼んでもらえる。これは長州さんのおかげだ。学生時代を振り返って思うのは、部活も勉強もトレーニングも恋愛も、その当時は『無駄かな?』と思ったことも、全力で打ち込んだ経験は必ずどこかで役に立つ、ということだ。」(同上書、29頁)と、棚橋さんは語る。新日本プロレスで権威あるIWGPヘビー級王座の11連続防衛という記録を有するレスラー@棚橋さんながら、2002年人生最大の危機?に直面する。一時交際していた女性とトラブル?になり、背中を相手に刺されて出血で一時意識不明となる事件が起きる。こんな女性絡みのスキャンダルを起こして、棚橋さん自身レスラー人生はもう終わったな!と覚悟したという。しかし、このピンチ?のなか先輩レスラー@長州力さんが「人生は長い。諦めずめげずに頑張れ!」と、檄をとばしたという。棚橋さんは、熱くかく語る。「号泣した。感情が高ぶっていることもあって、涙が止まらなかった。追いつめられているときに手をさしのべてくれた人のことは、きっと一生忘れないと思う。ああいう経験をすると、いつか逆の立場になったときに長州さんのようなことができる人間になりたい、と思う。僕は幸運にも、会社から復帰を許された。…僕はプロレスに救われた人生だ。プロレスという特殊な業界・ジャンルでなければ、カムバックはできない事件だった。あれ以来『僕はプロレスに生かされている』と

思うようになったし、もう一度チャンスをくれた新日本プロレスにはどんなに感謝しても、しきれないと思っている。あれから、僕は憑き物が落ちたようにプロレスのことだけを考えるようになった。」(同上書、57～58頁)。プロレスをあまりご存じない?読者でも、今や長州力さんらレスラーをクイズ番組などのテレビ@バラエティでご覧になっていると思う。僕@谷本も子どものころ、絶対的な存在として君臨していたアントニオ猪木さんを、革命戦士@長州力さんが見事!カラリアットで勝った雄姿(猪木越え)をテレビでみて、興奮した記憶が印象深い。さらに棚橋さんらの活躍する時代となり、棚橋さんはかく誓う。「圧倒的に足りないのは知名度だ。いまの新日本プロレスは、まだプロレスファンという『知っている人』のサークルの中で盛り上がっているだけ。まだまだだと思う。だから(意外と思われるかもしれないが)、これからの僕のテーマは『猪木越え』だ。…『猪木越え』のためには、やはりテレビ中継をゴールデンタイムに戻すことだ。」(同上書、249頁)。そして、棚橋さんもレスラー人生を振り返り、まったく辛いな!という思いはなかったという。羽生名人と同様のコメントといえよう。

俳優@風間杜夫さんは、子役キャリアをもって早稲田大学に入学したが、大学を中退して「演劇」の世界に身を投じていくことになる。「演劇サークルに惹かれました。なんとしてもここに入りたいと思って、一年浪人して早稲田に入りました。ただ、当時は第二次早大闘争という学園紛争の最中で、教室もロックアウトされていて、僕の入ったサークルは一年で無くなってしまったんです。…でも、これじゃいかんということで劇団俳優小劇場という劇団の付属の養成所へ行きました、大竹まこと、きたろう、斉木しげると出会いまして、彼らと劇団の活動を始めたんです。」(インタビュー「風間杜夫」春日太一編『役者は一日にしてならず』2015年、283頁)。その頃、演出家@つかこうへいさんと風間さんは出会い、舞台上で芝居に熱心に励むことになる。「つか

さんの舞台には台本がないんですよ。新作の場合、全て口立てなんです。稽古場に役者を集めて、『おい、ちょっと風間出る』『平田出る』と言ったら、御自分で二人分のセリフを作っていく。僕たちはそれを何回もやりながら覚えていく。最終的には活字になるんですが、一か月の稽古の最後の一週間くらいまで口立てで、場面を作っては壊し、また新しく増やす。そういう繰り返しでした。」(同上書、284頁)。1982年、つかさんの舞台『蒲田行進曲』を深作欣二監督が映画化するにあたって、主役の「銀ちゃん」に風間さんは抜擢され、堂々と演技脚光を浴びることになる。風間さんは、その後大先輩である俳優@森繁久彌さんとテレビ時代劇で共演した折り、「セリフなんて覚えてきちゃダメだ。相手役がどういう芝居をするのかとか、現場で感じたことが大事なんだから。」(同上書、290頁)と強調され、自分でもそうだ!と思い、大体の流れなどは把握しながらも、あまり台詞は覚えて臨まないように意識しているという。へ。驚。風間さんなりの俳優哲学@演技の拘りについて、かく語っている。「ホン(台本)を読む時は『ああ、この人間のこの部分は俺にあるな』とか『これはよく分かる』というところを探っていきます。そうすると、いくつかあるんですよ。そこを拡大して注ぎ込む。ですから、どの役も僕の分身なんです。…ですから第一に考えたいのは、役が魅力的に書かれているかどうかです。主役なのか、準主役なのか、脇役なのかということよりも、書かれている人間が演技甲斐があるか、僕を惹きつけるものがあるかないかを大事にしています」(同上書、294～295頁)と。『ごめんね青春!』や『マッサン』での風間さんの見事な?振り切った演技をみる限り、役者とはここまで存分に演技られるものか!と痛感する。風間さんもまた、俳優を辞めたい!と思ったことはないという。

大阪市の女子教育③

—大阪府における女子教育の概要・その2—

とくやま りんこ

徳山 倫子(京都大学大学院)

今回のニューズレターでは前回に引き続き、大阪府における女子教育の概要について述べることにする。

【4】世紀転換期の教育制度改革～明治末期：小学校付設各種学校の設置と女子教育の制度化

1900(明治33)年の第3次「小学校令」の公布により、それまで各地の小学校に付設されていた裁縫専修科は廃止された。同令では専修科についての条文が削除されており、そのことが裁縫専修科廃止の理由であると考えられている¹。ただし、法令上存在が認められなくなったのは専修科だけであり、この時期以降も補習科の設置は認められていた。しかし、裁縫専修科の廃止は、大阪府のように統計上では補習科として扱われていた地域においてもなされている²。名称に“専修科”という文字が入っていたため混同を招いたことが廃止の要因だったのだろうか。

第3次「小学校令」第17条には「幼稚園、盲啞学校其ノ他小学校二類スル各種学校ハ之ヲ小学校ニ附設スルコトヲ得」という条文が追加されており、これを根拠に、裁縫専修科にかわるものとして各地で小学校付設各種学校が設置された。1895(明治28)年以降、各種学校は『文部省年報』等の統計書で、「小学校二類スル各種学校」・「中学校二類スル各種学校」・「高等女学校二類スル各種学校」・「其他ノ各種学校」に分類されており、多くの府県では小学校付設のこのような学校を「小学校二類スル各種学校」として分類していたようだが³、各種学校の分類基準は法令により明文化されておらず府県の裁量により振り分けられていたため⁴、大阪府においては私立

の裁縫学校とともに「其他ノ各種学校」として扱われていた。1909(明治42)年度に大阪府内に設置されていた公立の「其他ノ各種学校」の数は69校あり、そのうち64校が〇〇裁縫学校、残りの5校が〇〇女子手芸学校という名称であった⁵。前々回のニューズレターで触れた、大阪市立大学家政学部の源流であると筆者が考える西区女子手芸学校(1908(明治41)年設置)は、この類の学校として設置されたものである。

また、第3次「小学校令」公布の前年である1899(明治32)年には、「高等女学校令」・「実業学校令」が公布された。「高等女学校令」では各府県に高等女学校の設置を義務付けており、同令の公布により高等女学校は全国に設置され、校数が増加することとなった。同令は1910(明治43)年に改正され、「裁縫」の授業により多くの時数を割く実科高等女学校の設置が認められた。そして、「実業学校令」では、工業学校・農業学校・商業学校・商船学校の設置が認められたと同時に、第2次「小学校令」において「小学校ノ種類」とされた徒弟学校と実業補習学校を実業学校に加えることが定められた。実業学校は男子のための学校が多かったが、女子のための学校は徒弟学校として多数設置された。徒弟学校は本来、職工徒弟を養成するための学校として制度化されたものであったが、「徒弟学校規程」第15条に、「女子ニ裁縫、機織及其ノ他ノ職業ヲ授クル為ニ設クル所ノ女子職業学校ニシテ此ノ規程ニ依ルモノハ徒弟学校ノ種類トス」という条文があったため、多くの地域で女子に「裁縫」・「手芸」等を課す学校としての設置が進んだのである⁶。

大阪府においては明治末年までに、小学校付設各種学校の他に、高等女学校・実科高等女学校・徒弟学校が公立女学校として設置された。前号で述べたように大阪府には、高等女学校が制度化される前からすでに大阪市立高等女学校が設置されていたが、同校は市の北部に所在していたため、市の南部に高等女学校が増設されることとなり、1900(明治33)年に大阪

市立第二高等女学校が開設された(この際、既設の高等女学校は大阪市立第一高等女学校と改称された)。さらに、堺市に設置されていた堺区立堺女学校も同年より堺市立堺高等女学校となった。しかしその後、高等女学校の設置は市ではなく府が担うという方針となり、大阪市立の2校は1901(明治34)年に、堺市立の1校は1912(明治45)年に府に移管されることとなった。加えて、明治末年までに大阪市内には府立高等女学校が2校増設され、市内の府立高等女学校は計4校になった。さらに、郡部でも高等女学校の設置が進められ、1901(明治34)年には郡立の泉南高等女学校が設置されている(同校は1915(大正4)年に府に移管された)⁷。

このように市部・郡部で高等女学校が設置され、女学校増設の気運は高まっていたが⁸、予算を圧迫する高等女学校の設置は地方にとっては容易なことではなかった。そのため、高等女学校設置の前段階として設置されたのが、徒弟学校や実科高等女学校である。これらの学校は、小学校への併設が可能である等、高等女学校よりも設置基準が緩やかであり、比較的設置しやすいものであった。大阪府内においては、堺市の堺市立堺女子手芸学校・三島郡の学校組合立三島女子技芸学校・南河内郡の学校組合立富田林女子技芸学校の3校が女子徒弟学校として設置された。これらのうち、三島女子技芸女学校と富田林女子技芸女学校は小学校付設各種学校を前身としている。大阪府に設置された徒弟学校3校は、いずれも実科高等女学校へと組織変更された後に、大正期には高等女学校へと「昇格」された。制度の拡充による女子教育機関の複線化は、高等女学校を頂点とした序列化と「昇格」運動をもたらすことになったのである⁹。

当初の予定では、「大阪府における女子教育の概要」は前回・今回の2回で終わらせる予定であったが、長文になるため残りは次回で述べることにする。

¹ 赤石清悦・小金井義『各種学校』帝国地方行政学会、1964、22頁、土方苑子「府県学事年報に見る「小学校二類スル各種学校」」藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編『教育学の最前線』世織書房、2004年、164-165頁。

² 大阪府教育委員会（編・発行）『大阪府教育百年史』第1巻、1973年、533頁。

³ 土方苑子『近代日本の学校と地域社会 村の子どもはどう生きたか』東京大学出版会、1994年、194頁、土方苑子「府県学事年報に見る「小学校二類スル各種学校」」藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編『教育学の最前線』世織書房、2004年、164-165頁、森岡伸枝『「女子公教育」の生成過程』奈良女子大学学位論文、2004年、110-111頁。

⁴ 小林正泰「学校制度体系と各種学校」土方苑子編『各種学校の歴史的研究 明治東京・私立学校の原風景』東京大学出版会、2008年、79頁。

⁵ 1910(明治43)年度『大阪府統計書』。

⁶ このことに関しては、高田由夫「徒弟学校解体に関する考察」(『教育学雑誌』28、1994年)に詳しい。

⁷ 大阪府教育委員会（編・発行）『大阪府教育百年史』第1巻、1973年、539-545頁。

⁸ ただし、「女子に学問は不要」という考えも根強くあったであろうことも忘れてはならないだろう。

⁹ このことについては、拙稿「都市近郊農村における初等後教育の展開—大阪府郡部の高等小学校付設裁縫専修科に着目して—」(『農業史研究』49、2015年)でも論じた。学校昇格や女学校間の序列については、実科高等女学校から高等女学校への「昇格」を扱った富士原雅弘「地域からみた女子中等学校の普及拡大過程に関する実証的研究—宮崎県高鍋実

科高等女学校を事例として」(『教育学雑誌』45、2010年)等、複数の先行研究が存在する。

近代日本における大学予備教育の研究① —東京商科大学予科と旧制高校の学科課程—

やまもと たけし

山本 剛 (早稲田大学大学院)

はじめに

前号では、東京商科大学の大学予科廃止案をめぐる反対運動に注目した。ここで同大学は、高等普通教育と商学研究のための予備知識を修得するために大学予科の併置が必要であると主張した。とりわけ旧制高校卒業生を收容することについて、「一般高等学校から入学する商大生は成績の上に於て疑念」があるとした。したがって「商大の学生には商用英語とか簿記とか珠算とか特殊の素養が必要である」ので、商業大学の大学予科で「一貫した教育を施し」、「卒業生の素質を良くする」ことが必要であるとした。こうした論拠は近代日本における商業系大学の大学予備教育の特質を検討するうえで注目された¹。

本号では、このような主張をうけて、同大学の大学予備教育をさらに検討するために旧制高校の学科課程との比較検討を行う。また、同大学予科の学科目について生徒はどのように考えていたのかについて、その一端を回想録から明らかにする。

1 旧制高校に関する考え

既述したように1920(大正9)年に官立商業大学として東京高等商業学校が組織を変更して東京商科大学へ昇格し、修業年限3年の大学予科が

設置された。この大学予科設置の経緯について教授会等の議事録は発見されておらず、その詳細を明らかにすることは困難であるとされている²。ただし、これに関して本ニューズレターでも今後検討する神戸商業大学において、1927(昭和2)年に同大学の学生委員が、大学予科設置をめぐる、神戸商大創立準備委員であった東京商科大学学長の佐野善作を訪れたときに、佐野が述べたことが参考になる³。佐野は、東京商大では、「上級学校入学の時機が偶然にも7月から4月に改正された折であって大学本科のみでは暫らくの間学生がいないと云ふ変な理由をこぞつけて予科を併置した」と述べて、東京商大の大学予科設置は必ずしも政府の意向ではなかった点を指摘している。すなわち、大学予科設置は、同大学の強い意向であったものと考えられる。続けて、佐野は神戸商業大学の大学予科設置に賛成し、「統一ある人格教育」のために大学予科は必要であるとした。そして旧制高校の学科課程について「現在の高等学校文科の課程は法科、文科等には適当かも知れないが商業大学教育にはどうかと思ふ」と、商業大学にとっては旧制高校の学科課程は問題があると指摘していた。さらに「高等学校文科の改造等も必要」と主張した。こうした佐野の発言からもわかるように東京商科大学では、旧制高校の学科課程では問題があったとしていた。

それでは、前号(9号)で述べたように1934(昭和9)年より新たに編成された同大学予科の学科課程を検討する。

2 学科課程

はじめに旧制高校と東京商科大学予科の学科目をあげると以下の通りである。

「高等学校高等科文科」

修身、国語及漢文、第一外国語、第二外国語、歴史、地理、哲学概説、

心理及論理、法制及経済、数学、自然科学、体操

「東京商科大学予科」

修身、国語漢文、英語、独逸語又仏蘭西語、歴史、地理、自然科学、工業通論、数学、商業数学、哲学、心理及論理、簿記、商業通論、法制経済、体操

このように旧制高校の学科目と比較すると、東京商科大学予科では、線をひいた工業通論、商業数学、簿記、商業通論などの商業系の学科目が設置されている。なお、表 1 は同大学予科の学科課程編成である。

表 1 東京商科大学予科の学科課程表⁴

学科目／学年	合計毎週時間数	毎週時間数		
		第一学年	第二学年	第三学年
修身	3	1	1	1
国語漢文	9	5	3	1
英語	25	9	8	8
独逸語又仏蘭西語	12	4	4	4
歴史	8	東洋史 2	国史 2 西洋史 2	西洋経済史 2
地理	4	2		経済地理 2
自然科学	2	2		
工業通論	2			2
数学	3	2	1	
商業数学	3	珠算 1		2
哲学	2			2
心理及論理	4	2	2	
簿記	5		3	2
商業通論	2		2	
法制経済	6		2	4
体操	9	3	3	3
合計	99	33	33	33

同大学では、1933(昭和 8)年に学制改革案が教授会の議に上がり⁵、「予科一年・二年で高等普通教育を、予科三年、本科一年で専門教育を受け、本科二年、三年で自由に各自研究する」という「予科、本科の融然たる統一的教育を本願」とした改革が行われた⁶。この学制改革案をうけて、上記の 1934(昭和 9)年の学科課程編成になったと考えられるが、学科課程表によると疑問点もあり今後の検討が必要である。

いずれにせよ同大学では高等普通教育と商学研究のための予備知識を修得する学科課程編成であった。

それでは、大学予科の学科目に関して、生徒はどのように考えていたのであろうか。大学予科設置時には「自然科学、論理学、高等数学を欠き」、「高等算術は二ヶ年続けて講義があり、銀行論、貨幣論等の高商臭味のもの」があり、予科生は不満を持ったとされている⁷。また、『座談会 花開く東京商科大学予科と寮』には、卒業生が大学予科の授業の体験を語っている⁸。それによると、大学予科で「そろばん、習字、作文」があり「がっかりした」(大正 9 年入学者)。「商業作文」として「大学予科の授業で、小売商店がチラシを配る」ときの文章を書かせられて困った(大正 9 年入学者)。また、1933(昭和 8)年ごろからは、予科の入学試験の国語の作文は毛筆で書かせ、1930(昭和 5)年には一年生に習字が課され、さらに 3 年生では「候文での手紙の書き方」があったとしている⁹。そして、「英文の商業通信」もあり、また「細かい字の英文プリントを使って、細かい計算」をする「商業算術」には「みな悩まされた」。「簿記」は一年で「商業簿記」、二年で「工業簿記」、三年で「銀行簿記と英語簿記」であったと述べている¹⁰。その一方で、「哲学概論」の授業もあり、「いろいろな科目を取り混ぜて」、「大きな期待を持って作ったのが大学予科」であったと大学予科の教育を回顧している¹¹。

この回想録によると、上記の学科課程表や改正前の学科課程表(前回 9 号に掲載)と必ずしも一致しないものもあり今後詳細に検討する必要がある

が、大学予科では、商学研究のための予備知識の修得が期されていたことは窺える。

以上のように、同大学予科では旧制高校の学科課程にはない学科目が行われていたのである。

—————
¹「臨時役員会」昭和6年10月5日『一橋籠城事件(昭和六年十月)』(一橋大学学園史編纂事業委員会、1982年)所収、194-197頁。

²『座談会 花開く東京商科大学予科と寮』(一橋大学学園史編纂委員会、昭和59年)、31頁。

³「予科併置問題につき佐野商大学長は語る」『筒台学報』第5号、(昭和2年11月1日)。

⁴『東京商科大学一覧』(昭和9年、東京商科大学)。

⁵「学制改革案の大綱漸く目鼻付く来学年より実施の運び」『一橋新聞』第178号、(昭和8年11月13日)。なお、本稿では『一橋新聞』については、『一橋大学学制史資料』第八集(一橋大学学園史編集委員会、昭和58年)を引用した。314頁。

⁶「協議半歳を貫して漸く大詰めへ学制改革案大綱決る」『一橋新聞』第182号、(昭和9年1月29日)、同前『一橋大学学制史資料』第八集 316頁-317頁。

⁷『一橋五十年史』(東京商科大学一橋会、大正14年)、237頁。

⁸前掲『座談会 花開く東京商科大学予科と寮』、25-31頁。

⁹同前『座談会 花開く東京商科大学予科と寮』、28頁。

¹⁰同前『座談会 花開く東京商科大学予科と寮』では、昭和5年入学者の者は、昭和15年まではこのような学科目であったと述べている。28頁。

¹¹同前『座談会 花開く東京商科大学予科と寮』、31頁。

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道

第 11 回 学校沿革史にみる補習科・専攻科(7):島根県(1)

よしの たけひろ
吉野 剛弘(東京電機大学)

今号からは、島根県の補習科を検討していくことにする。島根県の補習科は、今なお存続している。それゆえに、これまで検討してきた福岡県とは異なる様相を呈することになる。

島根県の高等学校で補習科を設置したのは、松江北高等学校、松江南高等学校、松江東高等学校、出雲高等学校、浜田高等学校である。福岡県で補習科を設置した高等学校の多くが旧制中学校を前身に持つ学校だが、島根県でそれに該当するのは松江北高等学校と浜田高等学校のみである。ただし、松江南高等学校は松江北高等学校(当時は松江高等学校)を分離させる形で設置されている。出雲地域にあった旧制中学校は大社高等学校となっており、出雲高等学校は高等女学校を前身としている。松江東高等学校は、1983(昭和58)年に設置され、第1回の卒業生を送り出した1986(昭和61)年に補習科を設置している。

新設の松江東高等学校を除いて、残りの4校はすべて1966(昭和41)年にPTA立の補習科を設置している。4校が揃って同じ年に設置しているということからも分かるように、この4校は協同して補習科の設置に動いた。補習科の設置に動いたという表現は正しくはなく、正確に言えば専攻科として設置することを模索した。つまり、島根県の補習科は、専攻科が挫折した結果、止む無くPTA立のものとして実現したのである。島根県の補習科を検討する上で最も重要なのは、この設置の経緯である。以下、番号にわたってその点を検討していくことにしたい。

専攻科設置に向けた動きが出る前から、島根県には高等学校による受験準備教育に向けた胎動があった。『浜田高等学校百年史』(1994年)では、

1956(昭和31)年の『濱高新聞』第18号の記事の一部を紹介している。その記事は東京都立日比谷高等学校を訪問した際の様子を報告したもののだが、内容は以下の通りである。

ママ

今年の(東大の・原注)入学者九九人のうち現役で入ったものは三〇人、あとはいわゆる浪人だそうである。浪人が多くいるのは当たり前、現役では入れたらもうけものとはまではいかなくても浪人することなど何でもないというのが、この学校のこういった都会での常識のようになっているようである。現にこの学校では浪人の為に補習科というものが設けられてあって、浪人ととも学校に通わせてもらえるそうだからうらやましい話だ。それからおもしろいことには、これだけの成績をあげていながら補習など全然ないそうだ。(p.975)

当時の浜田高等学校には、「聴講生」という、卒業生が上級学校の受験準備のために現役生と一緒に授業を受けるという制度があったが、卒業生のための組織があったわけではなかった(同前)。そのような状況で日比谷高等学校を訪問し、その補習科をして「うらやましい話だ」と評しているのである。

つまり、島根県の補習科は、学校当局や保護者が求めていただけでなく、生徒自身が求めている向きがあったということである。この点は非常に重要である。『浜田高等学校百年史』では、昭和30年代の広島市の高等学校における補習科廃止への動きを引き合いに出して、「少なくとも浜田高校の生徒にとっては卒業後もその学校で学習を続けられる制度は、大変有意義なものに映っていたことが分かる」と評している。学校外に受験準備教育機関がどのくらい存在していたかも関係してくるが、島根県における生徒側の積極性は特筆されてよい。

事実、この時期の広島県では、補習科廃止の方向に動いていた。それどころか、生徒からも批判が出る状況であった。『広島一中国泰寺高百年史』（1977年）では、入学試験を実施しなければならなかった1955（昭和30）年の補習科の状況に関して、『国高新聞』に掲載された生徒の文章を紹介している。その一部を以下に掲げる。

今年もこれら浪人諸君が増えて学校当局は補習科を設けて浪人教育を行おうとしているのだが、この補習科の試験に落ちたらどうなるのだろうか。このように浪人が多いのは高校教育に欠陥があるのではなからうか。またその欠陥は大学側にも大いにある。校長先生は『現在の入試の状況にはまだまだ満足できない』といわれたが、すべて一流大学と定評のある大学に受からなければならないというのであろうか。……このような悪循環をこのままにしてよいであろうか。
(pp.601-602)

このような生徒による受験体制への批判の声が広島県であがっていたことを考えたとき、補習科設置校を「うらやましい」という島根県の生徒たちの反応はさらに際立つことになる。もちろん島根県の高等学校の生徒が広島県の生徒と同様なことを全く考えていなかったわけでもないのだろうが、現実的な必要性が勝っていたということである。

それから数年の時を経て、専攻科設置に向けての動きが起こる。専攻科設置に向けた動きとして最も早いのは、1963（昭和38）年11月の吉田出雲高等学校長と米山同PTA会長等による県当局への申請である。そこでは、県議会での「趣旨採択」にとどまり、設置にまでは至らなかったという（『出雲高等学校史』（1990年）、pp530-531）。

その後、松江北高等学校では1966（昭和41）年1月に、出雲高等学校

では同年 2 月 15 日に、県に専攻科設置の申請を出している。そこでどのような主張が展開されたのかは、次号で検討していく。

【追記】

前号で、福岡県の補習科から分離させた各種学校として現存しているのは、福岡高等学校の福高研修学園のみであるとした。ところが、その福高研修学園が 2015 (平成 27) 年度をもって閉校するとのことである(「県立高「併設」予備校ゼロ 県内最後「福高研修」閉校へ」『西日本新聞』2015 (平成 27) 年 10 月 16 日)。

まさに補習科の系譜が幕を閉じようとしているということでもある。資料の散逸の心配もさることながら、このような状況であればこそ、その研究もまた進展させねばならないと、思いを強くした次第である。

活版印刷以前の校内雑誌

つつみ

堤 ひろゆき(東京大学大学総合教育研究センター)

これまでのニューズレター各号では、主に長野県松本中学校での校友会雑誌を用いて、内容の分析を紹介してきた。これらの雑誌は活版印刷によって大量に印刷され、発行されていた。当時中学校はその所在地域の知の拠点のひとつであったことは周知であるが、具体的なありようについて検討するには、中学校と地域との関わりについて検討することが必要であろう。今回は、中学校と地域の知的な交流について接近する可能性のある史料を紹介したい。対象とするのは、長野県松本市に所在した長野県尋常中学校である。

生徒が発行に関与していた雑誌は、校友会雑誌に限られたものではない。すでに、学校が設置した寄宿舎において、「茶話会」という名前の「舎内生徒の機関」を作っていたようである。「茶話会」は「舎内有志に依て組織せられ通常会員（生徒）特別会員（職員）の二あり、通常会員の中にも内外員の二あり、毎月一回開会し会員相互の交りを睦ふし又交互の智識を交換し、「又筆記雑誌あり名づけて「行餘以文」といふ、毎月一回発行し会員の間に廻して同会の目的を輔く」¹雑誌を発行していた。現時点でこの『行餘以文』という回覧雑誌の現存は確認できておらず、内容は不明である。しかしながら、この記述から寄宿舎の回覧雑誌は寄宿舎内の有志の間での交流が目されていたことはわかる。

もとより、回覧雑誌はそれだけではない。1892年から1893年当時に発行されていた回覧雑誌『深志学会誌』の存在は確認している。現在調査中のため、当該「深志学会」がその他の団体とどのような関係にあるのかは不明であるが、例えば『校友』第1号に言及のある「普通学会」とは異なるものようである。普通学会は「実業に対峙して本年（1895年——引用者）六月起れるもの」である。普通学会は会則第一條に「本会ハ普通学会ト称シ長野県尋常中学校普通科生徒ヲ以テ組織ス」、第二條に「本会ノ目的ハ普通学ヲ研究スルニ在リ」、第三條に会員を通常会員と賛成員と規定していた²。

わずかな例であるが、上述の「普通学会」も生徒を対象として、生徒内での知的な交流が主な目的として表れている。「深志学会」は、中学校（ここでは尋常中学校）生徒以外の人々をも構成員としていた可能性がある。

『深志学会誌』は、現在確認できているだけで7冊あり、第49号（明治25年5月25日）、第51号（明治25年7月25日）、第52号（明治25年9月）、第59号甲部（明治26年4月）、第59号乙部（明治26年4月）、第60号（明治26年5月）、第61号（明治26年6月30日）である。

「深志学会」の名入りの縦罫入り原稿用紙に筆記で記入され、会員間での回覧によって閲覧されていた³。

「深志学会」は、その規則を以下のように定めている。

深志学会規則

総則 第一條

本会ハ智識ノ発達ヲ計リ特技ノ淳厚ヲ期シ且ツ親睦ヲ厚フスルヲ以テ目的トス

第二條

本会ハ深志学会ト称シ其事務所ヲ信濃国松本ニ置ク

第三條

前條ノ目的ヲ達センガ為メ会合ヲ催フシ及ビ雑誌ヲ発行ス

會員 第四條

本會員ヲ分ツテ名譽會員、正員、准員の三トナス
(中略——引用者)

第八條

本会誌ハ深志学会誌ト称シ毎月一回編輯シ會員ニ回覧ス
(中略——引用者)

入会退会除名 第十四條

入会セントスルモノハ會員二名以上ノ紹介ニヨリ其族籍姓名職業及ビ住処ヲ記載シ職員ニ届出デ其承諾ヲ経可

第十五條

入会后姓名族籍住処及ビ職業等ヲ変換スル時ハ其上日事務所へ報知ス可シ

(中略——引用者)

明治二十六年四月⁴

現存する雑誌の発行間隔から、およそ「毎月一回」の発行は守られていたのではないかと考えられる。そうすると、およそ明治 20 年代前半から発行されていたと考えられる。

注目したいのは、「入会退会除名」を定めた第十四條と第十五條の、「職業」である。中学生が前提となっているのであれば職業を届け出させる必要はない。これは、職業を持っていた学校外の人々を会員としていた組織であったことを意味しているのではないだろうか。

回覧に加わる会員の一覧は、各号の末尾に記載されている。その一覧では、第 52 号までは会員が「〇〇君」と表記され、具体的な所属や人物の特定はやや困難である。しかしながら、一部の会員は生徒であることが同定でき、さらに第 60 号、第 61 号では中学校教員が姓名で表記されていることから、尋常中学校松本本校の関係者がなんらかの関わりを持っていたことを示すことができる。

会員の具体的な特定や内容の検討については今後さらにすすめていきたいと考えているが、現時点では不明である。「職業」を提出させていたからといって、学校外の人物が関わっていたことの証左にはならないが、地域における知の交流拠点としての中学校に迫ることが可能となるかもしれない。

¹ 「校内雑記 寄宿舎」『校友』第 3 号（長野県尋常中学校校友編輯課、1896 年 3 月）、55 頁-56 頁。

² 「普通学会」『校友』第 1 号（長野県尋常中学校校友編輯課、1895 年 11 月）、95 頁。

³ 『深志学会誌』各号。末尾には回覧期間を一人あたり一日として、次の会員に回すことが繰り返し言及されている。

⁴ 『深志学会誌』第 60 号（深志学会、1893 年 6 月）。

〈資料紹介〉立教大学における戦後資料

—『立教大学新聞』にみる学生運動(6)—

たなか さとこ

田中 智子(立教大学立教学院史資料センター)

今回は、前回述べた 60 年安保闘争と時間は前後するが、1953 年に行われた全学連主催の全国学園復興会議と、その時の立教大学の動きについて見ていきたい。全国学園復興会議とは、「教授、職員学生の団結によって明るい学園を復興しよう」をスローガンとして、1953 年 11 月 8 日より 5 日間の予定で京都大学¹・同志社大学・立命館大学を会場に行われたものである²。同会議には全国 70 の大学から約 500 名が参加したといわれる。会議 4 日目に、立命館大学のデモ行進に合流することとなった京大学生らが、鴨川にかかる荒神橋付近にさしかかった際警官隊ともみ合いになった。この際、橋の欄干が外れて学生 15 名が川に転落し、うち 7 名が重軽傷を負っている(所謂「荒神橋事件」)。

前々号で述べた通り、立教大学においては「共産主義運動は、基督教の世界観に立つ本学の教育方針と相容れぬものがある」ことから、学生会の全学連加入を認めてこなかった。しかしながら、この会議に立教から少なくとも 3 名の代表が派遣されており、しかも「荒神橋事件」の際、内 1 名が「全治三カ月以上の傷を受けた」とされている³。

この事件に関して、立教大学では同月 18 日、緊急で級委員会が開かれ、以下の 5 点が決議されている。

- (一) 学園復興会議の意義を立教全体なものとするためにあらゆる運動を行う。
- (二) (負傷学生名一筆者注) 君および今度の事件で傷いた多くの人々のために救援隊を結成し、あらゆる援助を行う。

- (三) 他校との横の連絡を計り、これらの動きに弾圧を加える勢力を粉砕する。
- (四) これがために各級委員はクラスに入り討論し、カンパを行う。
- (五) 教授会並びに部長会、職員に従来に増しての協力を仰ぐ。⁴

以上のように、級委員会は当初、学園復興会議およびそこにおける負傷者に対して同情的な見方をしていた。そして、負傷学生に対するカンパを熱心に集め、「代表団帰京後二日にして二万数千円に達するという驚異的な成果を見せた」そうである。しかしながら、後に京都の病院に絶対安静で入院しているはずの負傷学生が自宅で療養していることが判明するなど、級委員会の「同情のために事実をも曲げた態度」が批判的となる⁵。こうしたことも影響してか、12月20日に開かれた級委員定期総会において、「学園復興会議と全学連との関係は代表団を送る前に知っていたのではないか」という点、および座り込み・デモについて「執行部でその様な行動を制限されているのに拘らず行動に出たのか」等の点が追及され、賛成 39・反対 12 で委員長・議長不信任案が可決されている⁶。

以上の経緯を見る限り、この時期の立教大学においてもやはり全学連に加入すること、およびデモに参加することなどは禁止されていたと考えられる。しかしながら、前号で述べた通り、60年安保闘争時には学生たちが多数デモに参加している。この変化がいつどのような経緯で起こったのか、次号以降詳しく見ていきたい。

*資料に関するお問い合わせは、田中 (s.tanaka@rikkyo.ac.jp) まで

¹ 会場の一つであった京都大学法経第一教室は、大学当局によって使用を拒否された。これにより、学生代表と大学当局との間に衝突が生じたことが、

後述の「荒神橋事件」の背景となっている。

² 全国学園復興会議の開催の経緯等については、拙稿「戦後復興期における東京大学・京都大学の学生自治会：学園復興、学生生活支援、および労働者との共闘を中心に」（お茶の水女子大学グローバル COE プログラム『Proceedings：格差センシティブな人間発達科学の創成』第 12 号 2010 年）を参照されたい。

³ 「またも警官隊と衝突—全国学園復興会議— 本学々生も重傷負う」（『立教大学新聞』第 102 号、1953 年 11 月 20 日付）

⁴ 「緊急級委員総会開く」（『立教大学新聞』第 102 号、1953 年 11 月 20 日付）

⁵ 「級委員会の動きに一考」（『立教大学新聞』第 103 号、1953 年 12 月 20 日付）

⁶ 「委員長・議長不信任さる」（『立教大学新聞』第 104 号、1954 年 1 月 20 日付）

帝国大学の中の専門学校

—東北帝国大学工学専門部、九州帝国大学附属工業専門部—

まつしま てつや

松嶋 哲哉（日本大学大学院）

本号では、東北帝国大学工学専門部・医学専門部、九州帝国大学附属工業専門部の沿革を『沿革史』をもとにしてまとめてみたい。

1. 東北帝国大学工学専門部

東北帝国大学に附属された工学専門部・医学専門部は、それぞれ仙台高等工業学校及び仙台医学専門学校を直接の前身とするものであった。

仙台高等工業学校は、1906年、文部省直轄諸学校として設立された高等工業学校であった。仙台医学専門学校は、1901年、第二高等学校医学部が分離独立したものであった。これらの専門学校が、1912年東北帝国大学官制の改正によって、東北帝国大学の所管に移り、工業専門部・医学専門部となったのである。

『沿革史』では、既存の専門学校を帝国大学に包摂した理由を次のように述べている¹。

東北帝国大学が設置せられたが、その当初は仙台に新たに理科大学を設け、札幌農学校を東北帝国大学農科大学として総合大学たらしめたものであった。蓋し帝国大学は総合大学を根本義とし単科大学を認めないためであった。しかし、遠隔地の地にある二学部を統括することは極めて不便であったから、この不便を避ける手段として、明治四十五年に至つて、仙台医学専門学校と仙台高等工業学校をそれぞれ医学専門部並に工学専門部として附属せしめ、近き将来に於て医科大学及び工科大学たらしめんとしたものであろう。

つまり、総合大学としての東北帝国大学を目指すために、医専と高等工業学校を包摂したのであった。仙台に新たに設置された大学は理科大学であり、それだけでは単科大学となるため、医専・仙台高等工業学校を包摂することによって、医科大学・工科大学の設置を目指すための措置であったと捉えられている。

そのため、東北帝国大学に医科大学および工学部が設置されると同時に、専門部は存続の危機にたたされる。1915年、医科大学が設置されると同時に医学専門部の生徒募集は停止され、1918年廃止となる。同様に、1918年、東北帝国大学に工学部が設置されると、工学専門部は存続の危

機に陥った。工学専門部も工科大学設置に伴い廃止が検討されたのである。

しかし、1921年、工学専門部は仙台高等工業学校として独立を果たす。そこには、学校当局、卒業生、在校生たちによる存続運動があった。『沿革史』によれば、学部と専門の役割を次のように説明し、専門部の存続を主張した²。

大学と工学専門部はともに工業乃至工業を教授するが、大学の工学部は高等学校卒業生を収容する最高学府であつて、学術的であり、学生数は少ない。一方、工学専門部は中学校卒業生を収容して、工業界の中堅技術家を養成せんとし、学生数も多数に及ぶのであるから、この両者は両立し得るものである

専門部は「中堅技術家」を養成するために必要であるから、「学術的」な大学と併存すると主張する。これに、原内閣の高等教育拡充政策も関係して、工学専門部は存続が決定し、1921年、仙台高等工業学校として分離独立を果たしたとされている³。

仙台高等工業学校は、戦後「仙台工業大学」としての存続運動が展開されたが、東北大学工学部に吸収合併され廃校となってしまう。

2. 九州帝国大学附属工業専門部

九州帝国大学附属工業専門部は、1944年、新たに設置された。工業専門部の目的は「皇国ノ道ニ則リテ工業ニ関スル高等ノ教育ヲ施シ国家有用ノ人物ヲ鍊成スルヲ」こととされおり、戦時下における工業技術者の養成が目的とされていた。設置学科は、機械科、電気通信科、航空機科、造船科の4科であり、ここにも戦時下の影響が見られる⁴。

そのため、戦後になると工業専門部は廃止の危機にさらされる。戦後、繊細で校舎設備が十分でない学校、新設後設備不十分の学校の生徒募集を延期・停止する措置にともない、工業専門部も廃止されることとなった。これに対して、工業専門部の生徒たちが、工専存続委員会を組織し、工専反対を決議、工学部教授会も工専存続を応援することが決まったが、1946年に廃止が決定した。卒業生は2期生だけであり、1948年事実上の廃止となる。官制上は、1949年1月で廃止される⁵。

参考文献

- ・九州大学75年史編集委員会『九州大学七十五年史 通史』九州大学出版会、1992年。
- ・仙台高等工業学校創立100周年記念誌編集委員会編『仙台高等工業学校創立100周年記念誌』東北大学出版会、2006年。
- ・『東北大学五十年史』上巻・下巻、1960年。

¹『東北大学五十年史下』1960年、1797頁。同様の記述が『東北大学五十年史上』（1960年）、71-73頁。にもある。

² 同前書、1798頁。

³ 『東北大学五十年史下』1960年、1798-1799頁。

⁴ 「九州帝国大学附属工業専門部規則」『九州大学七十五年史 史料編上巻』1989年、635-642頁。

⁵ 『九州大学七十五年史 通史』1992年、81頁。

新制大学の生態誌(10)

—新制大学と戦争・平和〔4〕—

いのうえ

みかこ

井上 美香子(九州大学)

一般教育研究委員会(第一次)の研究成果の一集大成である『大学に於ける一般教育—一般教育研究委員会報告—』(以下、『報告書』(昭和26年))の特筆すべき特徴の1つが、人文科学・社会科学・自然科学の各系列に付された「まえがき」にあたる部分(以下、「まえがき」)にある。

それまで、昭和24年、25年に発表された『報告書』では、各系列の「まえがき」に目次は無く、その内容も各系列の部門委員会(例えば、昭和25年の『報告書』の社会科学部門では、関西地区社会科学部門委員会が執筆担当している)に委ねられていた。しかし、『報告書』(昭和26年)では、各系列の「まえがき」の内容に統一性をもたせている。その各系列の「まえがき」の目次は、以下のとおりである。

人文科学部門:人文科学の本質(87~90頁)、人文科学の教授法
(90~92頁)、カリキュラム(93頁)

社会学部門:社会科学の本質(251~253頁)、カリキュラム(253~
257頁)、学習指導(257~264頁)

自然科学部門:自然科学の本質(337~341頁)、カリキュラムと学習
指導(341~343頁)、教授法(343~346頁)

(カッコ内の数字は掲載頁)

ここでは、各系列で「本質」、「カリキュラム」、「教授法(学習指導)」について論じることとなっており、各系列の学問的「本質」に比重をおいて論じてきたそれまでの『報告書』とは明らかに異なる。しかも、掲載頁の分量をみても

明らかなおと、社会科学や自然科学系列では「カリキュラム」や「教授法」を重点的に論じていることがわかる。

何故、『報告書』(昭和 26 年)にだけこのような傾向が生じることとなったのか。その背景には、昭和 25 年 9 月から昭和 26 年 3 月にかけて開催された教育指導者講習会 一般教育部門(IFEL)の開催がある。

前号で紹介したように、『報告書』(昭和 26 年)は「IFEL の一般教育研究協議会や本員会の調査書を通して得た現下我国の大学に於ける一般教育の実状を参酌し(中略)IFEL 参加者の中からも適当な方に加わって貰い、(中略)なるべく IFEL 参加者の実際の授業プランをとり入れるように配慮」(vii 頁)して作成された。それゆえ、『報告書』(昭和 26 年)では、IFEL と同様に一般教育のカリキュラムや教授法に重点が置かれたものと考えられる。

この「まえがき」では、教授法について、「教授法に於て何より大切なのは学生に自発的な学習の意欲をおこさせること」(343 頁)であり、「教授が授業方法を工夫すること」(261 頁)の重要性が述べられている。教授法に着目する『報告書』(昭和 26 年)のこうした特徴は、「まえがき」の他に、同報告書ではじめて登場した「ガイダンス」(「緒論」55 頁～62 頁)への言及にも顕著にあらわれている。

ただし、各系列の「コースプラン」の項目で示された各科目の授業内容案は、それまでの昭和 24、25 年の『報告書』と同様、「授業内容」、「時間数」、「授業方法」、「実施上経験せる欠陥及びその対策」、「一般教育の改善と向上に対する意見」等について論じられており、「教授法」を重視する姿勢は見受けられない。

次号では、「コースプラン」において示された各系列の科目案の内容、そして、一般教育研究委員会の研究成果の一集大成である同報告書で、“戦争”や“平和”についてどの程度意識されたのか否かについて、みていくこととしたい。

「学生寮の時代」② 一裾野の広い先行研究一

かなざわ ふゆき

金澤 冬樹(東京理科大学職員)

●先行研究の粗描的検討

学生寮研究を始めるに当たり、まず先行研究を確認していきたい。本稿では、学生寮研究にはどのような先行研究の領域があるのか、粗描的に検討してみたい。

1、学生寮論(寄宿舍論)

近代日本において、学生寮(寄宿舍)は学校はもとより、修養団体や地方団体など多種多様な団体により設けられた。学生にとって大きな存在であった学生寮(寄宿舍)については、教育関係者の間でも盛んに論じられた。例えば、沢柳政太郎は寄宿舍の重要性を取り上げ、「寄宿舍の問題は実際教育家の研究のみに委せられて、教育学者が毫もこれらの点について研究しないことが、寄宿舍が利用せられない一つの理由であらうと思ふのである。寄宿舍の研究は、教育学上に於ても最も努めなければならない」と寄宿舍研究の重要性を指摘している¹。

それから、学生寮(寄宿舍)そのものを扱った研究も発表されている。広島高等師範学校教育研究会編『中等学校寄宿舍研究』では、全国200以上の中学校や実業学校における寄宿舍の実態を調査している²。運営状態、寮生活における学生の様子、設備など、各学校の例が紹介され、中等教育機関における寄宿舍が総合的に分析されている。

他に、大正時代に出版された滝浦文弥『寄宿舍と青年の教育』(1926年)が挙げられる。基督教青年会主事や第三高等学校教授・生徒監を務めた滝浦は、様々な学生寄宿舍の運営に従事した人物で、寄宿舍が衰退して

いる原因を「其の建築、組織、管理法、監督等について、真面目な研究がなされていないためではないか」³として本書を執筆している。その中では、学校・修養団体・地方団体などによる様々な学生寄宿舍が紹介され、欧米の学生寄宿舍との比較なども行われている⁴。

2、学生寮史

各学生寮では、50周年や100周年などを記念して寮史が編纂されている例が多数ある。「どの校も殆んど例外なく『寮史』を遺し」⁵ている旧制高校の寮はその最たるものである。例えば第一高等学校では、『向陵誌』や『第一高等学校自治寮六十年史』などが編纂されている⁶。

他にも、各団体が設立した学生寮においても、寮史が編まれている。例えば、札幌農学校から北海道帝国大学、北海道大学時代まで続いた青年寄宿舍は、卒業生などによりいくつかの編年史がまとめられている⁷。

3、学生寮の歴史的研究

学生寮に関する歴史的研究については、旧制高校の寮の研究が蓄積されている⁸。また、寮における「自治」の様態に関する分析として、本ニューズレターの富岡勝会員による第一高等中学校や京都帝国大学の寄宿舍の研究⁹、田中智子会員による第一高等学校の寄宿舍の研究¹⁰などがある。

他にも、高田知和は埼玉県出身学生のために設けられた埼玉学生誘掖会寄宿舍を取り上げ、炊事(学生による負債の処理や炊事運営)やスポーツの様態を紹介し、分析している¹¹。今泉朝雄は師範学校寄宿舍における制度的変遷と、それに伴う実態の変化を分析している¹²。

4、現代における学生寮の実践的研究

近年、大学における学生寮が再注目され、新設が相次いでいることを受け

て、その実践上の研究も盛んになりつつある。大学教育における学生寮の新たな位置づけを試みる研究¹³や、従来とは異なる実践を行う先鋭的な学生寮の取り組みを紹介・分析した研究も次々出されている¹⁴。

5、青年集団の歴史的研究

学生寮の歴史的な広がりを見ていくためには、歴史の中で青年集団が担った様々な試みを見無視はできない。例えば若者組は、近世以前における青年期教育の集団として存在したが、その教育的機能には近代以後の学生寮との類似を認めることができる¹⁵。また、近代以降の青年会や書生制度（名士宅への寄宿）など、寄宿を伴った多様な青年集団を研究の視野に入れる必要がある¹⁶。

6、共同生活の研究

近年、若者層において広がりを見せているルームシェアなどの共同生活。この様態に迫った研究¹⁷も、「他者との共同生活」における様々な点に迫っており、学生寮研究にも重要な視点を提供している。

●裾野の広い研究

以上、はなはだ簡素ながら、学生寮研究における先行研究を概観してみた。粗描的検討のため、海外における学生寮の歴史的研究・実践的研究¹⁸、学生寮経験者の回顧録¹⁹など、捕捉できていない領域も多く、今後詳しく検討していく必要がある。

なお本稿では、先行研究を学生寮の歴史的研究に限定せず、現代の実践的研究や様々な青年集団の研究を、敢えて視野に入れた。これは、学生寮をより多角的に分析することを目指すと同時に、今後の学生寮の可能性を幅広く考究するためである。次号以降は、これらの先行研究の詳細な検討を踏

まえて、学生寮の研究を進めていきたい。

¹ 沢柳政太郎『実際的教育学』同文館 1909 年、p399-400。沢柳は他にも、寄宿舎を「訓育を施すに最適當の場所」と論じている（沢柳『時代と教育』同文館 1905 年 p241-249）。

² 広島高等師範学校教育研究会編『中等学校寄宿舎研究』金港堂 1908 年。

³ 滝浦文弥『寄宿舎と青年の教育』単純生活社 1926 年、p3。

⁴ なお滝浦は、同書において寄宿舎監督のあり方などを展開しているが、基本的に学生の自治を肯定している点は特筆される。また、同書の記述にはキリスト教の思想が読み取れる。

⁵ 高橋佐門『旧制高等学校研究 一校風・寮歌論編』昭和出版 1978 年、p168。

⁶ 一高同窓会編『向陵誌』第 1 巻 1984 年、一高自治寮立寮百年委員会編『第一高等学校自治寮六十年史』1994 年など。

⁷ 奥田義正編『青年寄宿舎五十年史』1949 年、青年寄宿舎舎友会編『宮部金吾と舎生たち—青年寄宿舎 107 年の日誌に見る北大生』北海道大学出版会 2003 年など。

⁸ 旧制高等学校資料保存会編『資料集成 旧制高等学校全書』第 6 巻 生活・教養編(1) 1983 年など多数。

⁹ 富岡勝「旧制高校における寄宿舎と「校友会」の形成 一木下広次（一高校長）を中心に」『京都大学教育学部紀要』第 40 号 1994 年、同「京都帝国大学における寄宿舎「自治」の成立とその変化」『日本の教育史学』第 38 号 1995 年。

¹⁰ 田中智子「戦後学制改革期における第一高等学校寮自治の変容と継

承」『日本の教育史学』第 52 号 2009 年。

¹¹ 高田知和「学生寮の生活史—食と賄方の観点から」『生活学論叢』13 号 2008 年、同「同郷団体がつくった学生寮におけるスポーツ活動」『スポーツ史研究』第 25 号 2012 年など。

¹² 今泉朝雄「森文政期師範学校寄宿舎とその変化」『教育学雑誌』第 38 号 2003 年。

¹³ 望月由起「学生寮の機能多様化と大学のストラテジー」『リクルート カレッジマネジメント』183 号 2013 年など。

¹⁴ 耳塚寛明・桂瑠以「学生寮への教育的期待—お茶大 SCC の実践と課題」『京都大学高等教育研究』第 19 号 2013 年など。

¹⁵ 田嶋一は、幕府による教育政策と若者組の「二重構造」は、近代以降も、国民教育に対する「共同生活の論理に基づく古い人間形成の体系」として存続し、「この体系の一部は、青年会のほかに軍隊の内務班の生活秩序にも、さらにまた最も『近代的』であるはずの中、高等教育の中にさえも学生寮や寄宿舎の共同生活にみられるようなかたちでひきつがれることになった」と指摘している。田嶋一「若者組と青年期教育」『教育学研究』第 44 巻第 2 号 1977 年。

¹⁶ 若者組から青年会などへの変遷を分析した佐藤守『近代日本青年集団史研究』御茶の水書房 1970 年など。

¹⁷ 久保田裕之『他人と暮らす若者たち』集英社新書 2009 年、久保田裕之「若者の自立／自律と共同性の創造—シェアハウジング」牟田和恵編『家族を超える社会学—新たな生の基盤を求めて』新曜社 2009 年など。

¹⁸ 赤坂瑠以「アメリカの大学の学生寮視察調査—本学の学生寮への提案」『高等教育と学生支援』第 1 号 2010 年など。

¹⁹ 高橋健而老『回想の東大駒場寮—戦後日本を創りあげたエリートたち』ネスコ 1994 年など。

『岩手学事彙報』にみる奥羽各県尋常中学校生徒の比較試業

こみやま みちお
小宮山 道夫(広島大学)

岩手県教育委員会編『岩手近代教育史 第1巻 明治編』(1981年)の1002～1003頁に、「奥羽五県の競争試験」と題した記事がある。1889(明治22)年から23年に第二高等中学校が東北各県の尋常中学校に対して実施した競争学力試業の記事である。この「競争試業」は「各尋常中学校の第三年級の生徒五名ずつを選抜して、英語・数学・作文について試業を行い、その成績を競争するものであった。」という。その目的は「第二高等中学校が、その管下の各尋常中学校の学力程度を調査するとともに、多分に生徒の競争心を刺激して成績の向上をはかろうとするものであった」(以上、同書1002頁)と記されている。その試験の結果が表として掲載されているが、それによれば1889年の各尋常中学校の平均点は青森47.00、岩手51.40、秋田48.00、山形50.80(福島は校舎移転のため不参加)、1890年は青森41.64、岩手52.72、秋田42.86、山形58.80、福島51.70であったという。「各尋常中学校間の進度の不揃いなどのことがあり、必ずしもこれが各校の学力の実態であるとはいいがたいこともあって、その後は廃止されてしまった。」(同書1003頁)とあり、関係者の抵抗感はかなりのものであったと推察される。選抜生徒を参加させているだけに各校の上限を計るようなものであるし、不用に競争心を煽るようなものに成りかねないと危惧したためでもあろう。学力テストの公表はいつの時代も問題を孕んでいる。

さて、『岩手学事彙報』第139号(1888年12月15日)の「雑報」欄(13～14頁)には、この試業の発端となる奥羽尋常中学校長会議の様子が報じられている。

●奥羽尋常中学校長会議 予て第二高等中学校内に於て開会中の同会議は去月二十八日を以て閉会されしか今其の議決せし条項を聞くに(一)各尋常中学校の教科細目及び授業法を一定する事(二)各尋常中学校教員の資格を定める事(三)各尋常中学校生徒の比較試業を施行する事(四)各尋常中学校に於ては第二高等中学校医科志願生を特に養生する事(五)各尋常中学校卒業生中優等にして該学校長の保証する者に限り試験を須ひず第二高等中学校本科へ仮入学を許す事(六)学年試業及入学試業の問題を交換する事(七)各尋常中学校共可成紀律整頓は一様にする事(八)本校入学者は必前学校の保証状を持参せしむる事、以上八項目にして其内第三項の比較試業を施行する方法は第二高等中学校に於て先つ一定の問題を設け之を各尋常中学校に送付し各尋常中学校に於ては生徒をして右問題に対し筆記答案を作らしめて第二高等中学校に返附し第二高等中学校に於ては之を対照比較して其の優劣を定め又六項試業の問題を交換するは各尋常中学校相互に交換するにあらずして第二高等中学校と各尋常中学校の交換なりと云ふ尚ほ右会議に出席せしは岩手県尋常中学校長加藤正矩、山形県尋常中学校長大谷津直麿、秋田県尋常中学校長松田普齋、福島県尋常中学校長和田豊、青森県学務課員毛内嘉胤の五氏にして右の中加藤、大谷津、松田、毛内の四氏は濱尾専門学務局長と同伴去月三十日上京したりと本月八日の岩手日々新聞に見えたり

全8項目が検討されており、それぞれ気になる論点であるが、ここでは第3項の「各尋常中学校生徒の比較試業を施行する事」が重要である。「比較試業」の施行方法は、第二高等中学校が問題を作成して各尋常中学校に

送付、各尋常中学校が生徒にその問題の答案を作らせて第二高等中学校に返送する、第二高等中学校ではその結果を対照比較して優劣を定めるといふものである。また、第6項の「学年試業及入学試業の問題を交換」とは、各尋常中学校間ではなく、第二高等中学校との交換であり、生徒の単発の試業だけではなく、定期的な試験問題の情報までも遣り取りするという意味を持っている。恐らくそれらを総合して第5項の「各尋常中学校卒業生中優等にして該学校長の保証する者に限り試験を須ひず第二高等中学校本科へ仮入学を許す事」につながるのではないかと考える。第五高等中学校において、無試験入学者・編入者の出身学校別の試験成績を比較した史料が残されていることを拙稿「高等中学校と尋常中学校との接続関係に関する研究—第五高等中学校における入退学実態の分析—」（1880年代教育史研究会編『一八八〇年代教育史研究会年報』第3号、2011年10月、61～87頁所収）において指摘したが、この第二高等中学校の例は、恒常的な尋常中学校との連絡調整を志向している点で、第五区域よりもより具体的なアーティキュレーション確立のための試行として評価できるだろう。学校間の接続関係を確かなものとするためには、常日頃の生徒の学力の摺り合わせと評価方法の定式化、そしてそれを保証する密接な情報交換が必要であることは当時から認識されていたのだと言えよう。それが時代を超えてもなかなかスムーズにシステムチックにいかないのは何故か。もちろん要因は夥しくかつ複雑に絡み合うわけであるが、現代的課題として見つめ直す必要がありそうである。

どんなことが「自治ではない」とみなされたのか(9) —東京府尋常中学校長 勝浦鞆雄の校友会活動観(その1)—

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

前号までは松本中学校の相談会の活動に関する様々な自治活動観を紹介してきた。本号からは、東京府立第一中学校¹へ舞台を移し、同校の校友会組織である学友会(1890年に創設)の自治的活動に関する見解を紹介し、検討していく。

なぜ東京府立第一中学校を扱うのか。それは、同校が東京府尋常中学校時代の1890年代より全国的規模の中学校長の会議を開催するなど、他の中学校への影響力をもっていたことと、同校の校友会組織が他の中学校にも幅広く見られる「校長を代表とする強制加入型」校友会の早期の例であることからである(拙論「東京府尋常中学校における校友会の成立」²)。松本中学校の相談会のような、会長が生徒の互選で選ばれ、校長からの信頼を得てかなり幅広い裁量権をもっていた校友会組織と比較して、自治活動観(あるいは、どんなことが「自治ではない」とみなされたか)にどのような共通点や相違点があるのだろうか。

本号と次号では、1890年に学友会を創設し、その会長となった勝浦鞆雄校長の見解をみていく。

勝浦は、1891年11月に発刊した『学友会雑誌』第1号において、巻頭記事「学友会雑誌発行ニ就テ」を書いているので本号では、この記事を通して勝浦の学友会への期待について紹介する。

まず勝浦は、以下のように中学校の役割として徳性の涵養を強調していることに注目したい。

抑教育ハ学徒ノ徳性ヲ涵養スルヲ以テ其主眼トスルガ故ニ学芸ヲ授ケ

智能ヲ啓ク間ノ長キ年月モ其中心ヲ指揮シテ同一ノ方向ニ趨歸スル所
ヲ知ラシムベキハ即チ道義ナリ殊ニ中等教育ハ国家ノタメニ中年子弟
ヲ教導長養スル者ニシアレバ其普通教育中ニ在リテ最要タルハ蝶々ヲ
待タズ

そして、徳性涵養のためには、生徒たちが社会制裁について学ぶことが必
要あり、そのための場として以下のように学友会への期待を表明している。

会員諸子ハ即チ中学校生徒ニシテ実ニ我大日本帝国ノ中等教育ニ服
従シツハアル者ナリ而シテ将来ノ社会制裁ハ即チ諸子等ノ振興センコト
ヲ待チツハアルモノナリサレバ先ヅ此学友会テフ一団内ニ於テ其制裁ノ
基礎ヲ確定シ明治少年ノ模範タルハ論ヲ待タズ之ヲ大ニシテハ本邦將
来ニ於ケル道義ノ淵源トナリ風教ノ根帯トナリ之ヲ小ニシテハ一身ノ義
務ヲ行ヒ其責任ヲ完成センコトハ実ニ諸子ノ任ナリ若シソレ末ヲ追ヒ外
ニ馳セ流レヲ下リテ帰ルヲ忘ルハガ如キハ韃雄ノ諸子ニ望ム所に非ル
ナリ³

つまり、学友会を生徒たちが社会制裁を学ぶ場であるにとらえ、学友会での運動や雑誌編集などの活動（創設時の主な活動は文芸、武術、運動、遠足、遊泳、競漕）を通して、生徒たちが自分たちの役割や責任を果たし、新しい時代の社会制裁の土台をつくることを期待しているといえる。

しかし、現代人であるわたしたちには「社会制裁」という言葉だけで、勝浦が言いたいことを理解するのは難しい。社会制裁について勝浦が以下のように述べている。

其頃武士ト武士トノ相互ノ間ニ行ハレタル士道トイヘル自然発達ノ道

義ノ制裁アリテ武士ハ其ノ士道ノ完全ニ行ハルハヲ面目ト心得若シ之ニ反スル時ハ「面目ない」「相済まぬ」「あるましき事」等ノ简单ナル言語ヲ以テ自他ノ間ヲ律シ之レカ為メニハ生死ヲ決スルコト泰山ノ如ク鴻

ママ

毛ノ如ク且又他人ノ善ヲ攻ムルニモ「不届」「不埒」「不調法」等ノ語ヲ以テシ其ノ人其ノ罪ヲ負ヒテ自ラ改メサル限リハ之ト相齒スルコトヲモ愧チタル程ナリキカハル社会ノ自然制裁ノ武士相互ノ間ニ行ハレタルガ故ニ其ノ階級以下ノ者モ自然之ニ模倣シテ漫潤涵育ノ致ス所一般ノ風俗忠孝節義ヲ重ンジ本邦一種ノ美風ヲナシタリキ⁴

つまり勝浦は、武士たちが武士道徳に反した行為を生死に関わるような重大な恥として相互に戒め合っていた様子を、江戸時代までの社会制裁の代表例として説明している。このような「之レカ為メニハ生死ヲ決スルコト泰山ノ如ク」というような武士道徳は、藩が消滅してから 20 年近く経過した時点で、一般の人々にも、中学校生徒にも求めることは容易ではないだろう。

勝浦校長は、「旧来ノ社会制裁ハ已ニ破壊セラレー新ノ社会制裁ハ未タ鞏固ナラサル今日」⁵という認識のもとで、このようなものではない、新たな形の社会制裁を東京府尋常中学校で養成することを目指し、その養成の場として学友会という校友会組織に期待したのである。

次号では、勝浦が構想した新たな社会制裁と学友会についての関係を、別の史料を通じて見ていきたい。

¹ この校名であった期間が 1901 年～1943 年の長期にわたるので、基本的にはこの校名を用いるが、必要に応じて、東京府尋常中学校、東京府第一中学校など、各時期の校名も記載する。現在の東京都立日比谷高等学校。

² 『中等教育史研究』（中等教育史研究会）15 号、2008 年。

³ 『学友会雑誌』第1号、1891年11月26日、3頁～4頁。下線は富岡。

⁴ 同前掲書、1頁～2頁。

⁵ 同前掲書、2頁。

**『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項(2015年6月15日現在)**

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごまめに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

編集後記

ノーベル生理学・医学賞を受賞された大村智先生は、東京理科大学のご出身(大学院修士課程修了)です。私立大学出身者としては初めての受賞になります。東京理科大学は明治14年、20代の若者たちが設立した小さな学校から歩みを始めています。134年の歴史を経て、世界で活躍する人材を輩出する学校になったことを顧みると、非常に感慨深いです。また、歴史の中で「大学」が青年にとってどのような場であったのかを改めて考えさせる機会にもなりました。(金澤)

ジャーナリストの池上彰さん(1950年～)は、現代学生らに向け「教養」のススメを説いています。「教養を身につけるとは、歴史や文学…さまざまな分野の知の体系を学ぶことで、世界を知り、自然を知り、人を知ることです。」「一見『役に立たない』『関係ない』教養こそが、未来を生む創造的な力となるのです。」「教養を学ぶとは、時間をかけて何の役にも立たないムダなことに熱中することです。」(『池上彰の教養のススメ』2014年)。大学で学ぶとは、本来多様な学問教養の宝庫?で学ぶこと(至福の時)に他なりません。(谷本)

現在、職場で2032年(150周年)にむけて、『早稲田大学百五十年史』編纂事業が進められています。ここで主に「大学紛争」をどう描くかが問われているなか、本レターの田中智子さんの研究に刺激を受けています。今後、教育史で研究がすすめられるのでしょうか。歴史的評価もふくめて関心があります(山本)

11月初旬に、東京大学駒場博物館とともに立教学院展示と同史資料センターも訪問しました。大学アーカイブズの展示を、じっくり時間をかけて見学するというのは楽しいですね。ともにメモ用紙片手に2時間ほどかけて堪

能しました。(福岡)

いよいよ12月の有志懇親会(全員強制参加のようですが?)が近づいて参りました。担当K氏も何やら企画を考案中とのこと。楽しみです。そして昼間から飲みます。やはり研究者は酒飲みであって欲しいですね。アルハラと言われてしまいそうですが。。。(小宮山)

先日、ある研究会にて開催された大学のキャンパスツアーに参加しました。大学の建造物から、その大学の雰囲気(空気?)が伝わってきました。大学の建造物そのものが個々の大学の歴史を身に纏っています。当然のことなのですが、建造物そのものも“大学史”なのだ、改めて考えさせられる今日この頃です。(井上)

本日、本務校の名物ツリーが(試験的にではありますが)点灯しました。よくよく考えれば、あと一ヶ月でクリスマス、そして年末ですね。今年は仕事に勉強(研究にあらず)と、いつもの年よりハードな一年となりましたが、もうすぐ12月、文字通り「師走」で乗り切ります!(田中智子)

本ニュースレターを印刷される場合、Adobe Reader などの「小冊子印刷」機能を使ってA4サイズ両面刷りにすれば、ちょうどA5サイズの小冊子になります。